

芋 一 駄 御 書

建治元年八月一四日 五四歳

芋
いも一駄・はじかみ五十把把をくりたびて候。

この身の延ぶのやまと申し候は、にしは西しら白ねの根たけ、つねに雪ゆきを東みる。ひんがしに
はてん天しの子たけ、つねに日ひを北みる。きたは身みの延ぶのたけ、みなみは南たか鷹とりの取たけ、四
山の間あひ、はこの箱そこの戌ごとし。いぬ亥みの河すみ辰よりかは巳ながれて、たつ峰みの蟬すみに谷むか
う。かゝる猿いみじきところ、みねには猿せびの生こへ、たに草は似さるの芋さけび、木は生あしの
ごとし、くさは石あめに柔にたり。しかれどもかゝる草いもはみへ候はず、はじかみは生をひず。
いし石に柔にて少しまもりやわらかなり。くさ草に柔にてくさよりもあぢあり。

法華經に申しあげ候ひぬれば、御心ざしはさだめて釈迦仏しろしめしぬらん。恐々謹言。

八月十四日

日 蓮 花 押

御 返 事